

## 書評



岡本達明著

## 『水俣病の民衆史 第一巻』

前の時代 舞台としての三つの村と水俣湾』

日本評論社、2015年

評者 富田 義典

佐賀大学芸術地域デザイン学部特任教授

## I.

岡本達明氏（以下敬称略）は長きにわたり水俣および水俣病の民衆史を研究されてきた。このほど、その集大成というべき全六巻にわたる大著を完成された。本巻（以下、この書評中「本巻」という場合は全六巻のうちの第一巻を、「本書」とは六巻全体を指すこととする）は、水俣病の民衆史の前史にあたる時代をあつかっている。

本巻の内容に入る前に、著者岡本の経歴から紹介したい。岡本は、1957年東京大学法学部を卒業し、同年4月チッソ(株)（当時は新日本窒素肥料(株)。以下、チッソと略記）に入社した。この学歴からも推察されるように当初は会社幹部として社歴を積むことが期待されていた。同期で東大法学部からチッソに入社したなかに後に社長になる後藤舜吉もいた。

水俣に赴任した岡本はほどなく、当時当地にいた詩人・社会運動家の谷川雁と懇意となり影響を受ける。そして、そのことが会社に知れるところとなり、社内他県の事業所に移されるが、そこでも学卒の同僚と意気投合し谷川の提唱するサークル運動を行った。そのなかで岡本は社外の同年代の若い労働者と交流を深めた。またもや程なくしてサークル活動をしていることが露見し、それをさかいに会社は岡本を幹部候補コースから外し、地方の営業所を転々とさせるようになる。ちょうどそのころ、チッソの主力工場では労使関係が荒れ始めており、守山工場（滋賀県）では組合が合化労連に加盟を決めたのを機に組合分裂が起き、その2年後（62年）には水俣工場で、名高い安賃争議が起こった。その間岡本も、これらの工場の労働者や組合との交流はつづけており、安賃争議の終結後、組合専従として水俣に戻ることを決意し、組合（新日窒労組。この組合は安賃争議で分裂した組合のうちのいわゆる第一組合である）から専従として組合に戻ることが認められた。会社の意思には関わりなく水俣に戻ったのであり（組合専従指定権は組合にあった）、そのことを岡本自身は、「(会社による－評者)強制遍歴時代は終わり、やっと初心を追求する確かな足場に立つことができた」（第三巻、588ページ）と述懐している。ここで「初心」と言っているが、入社当初から岡本に旺盛な運動家としての志向があったわけではない。谷川雁からの感化や、会社からの扱いに対する反

発により岡本は変化していったと考えられる。

水俣に戻った岡本は、68年から組合の中核メンバーとして活動を始める。ちょうどこれはチッソが進めようとしていた大合理化の時期にあたる。岡本は70年には組合の委員長となり、組合運動を引っ張り、同時に水俣病問題に関わりをもちながら、水俣の一般市民とも深く広い交流を築いてゆくこととなる。

岡本は、運動家としての側面を持つとともに、たぐいまれな研究家としての関心と能力を持ちあわせており、若い時分から、水俣の地域社会や地域史、農民や漁民の生活史について研究を進めてきた。研究方法は、主に聞き取り調査であり、丁寧に築き上げてきた信頼に基づく人脈により貴重な研究成果を残してきた。それには、本人が主に活動したのが水俣病の原因企業であるチッソの第一組合であったことから来る使命感や情熱が背景にあったことは疑いを容れないところである。

岡本が、本書の発刊までに公にした民衆史のおもな業績には、『聞書 水俣民衆史』（全五巻、岡本達明・松本次夫編、草風館、1989-90年）がある。これは、農村を中心に明治初期から戦後直後までの水俣の地域社会の変化を古老から聞き取った話しをもとに編集した大部の作品であり、たいへん興味深い中身をもつ業績である。

その後も岡本は研究を継続してきた。そして、それらの研究が下地となって、本書『水俣病の民衆史』全六巻が姿を現すこととなったのである。

## Ⅱ.

本書は、なにしろ大部の作品である。各巻のタイトルだけでも紹介しておこう。

第一巻『前の時代－舞台としての三つの村と水俣湾』

第二巻『奇病時代 1955-1958』

第三巻『闘争時代（上） 1957-1969』

第四巻『闘争時代（下） 1968-1973』

第五巻『補償金時代 1973-2003』

第六巻『村の終わり』

本書評の任務は、第一巻の紹介と論評なのであるが、それぞれの巻がきれいに独立して成り立っているわけではない。重なり合いながら、叙述は進んでゆく。

そこで、まずは簡単に各巻の概略を紹介し、全巻の外観を得たうえで、第一巻の位置の説明をすることにしたい。

第一巻および第二巻は、水俣病が発現する前後の水俣湾・不知火海の漁村の状態に関する研究である。ちなみに、民衆史と言っても、岡本の視線は鋭角的であり、対象との距離の取り方にも大変厳しいところがある。岡本の方法はいわゆる民俗学のそれに近いのであろうが、日本の民俗学の叙述がしばしば醸しだすところの柔らかい雰囲気は本書にはあまりない。

さて、第一巻は、水俣病の発見まで、第二巻は、水俣病の存在が公式に確認されたところ

(1955年前後)を扱っている。対象としているのは水俣の三つ（厳密には四つ）の漁村で、病気発生までの村落のあり様が、水俣病の発現の仕方に影響してくる様が描かれている。

第三巻と第四巻は、水俣病がようやく社会問題として取り上げられた後の補償問題、患者らの闘争を扱う。第三巻は、被害を受けた漁民の闘争、患者の補償闘争、患者互助会の運動の様相、とくにその分裂、および水俣病原因企業チッソの労働組合であり筆者岡本のリードした労働組合である新日本窒素労働組合の運動を扱う。第四巻は、水俣病の患者の闘いが、生存潜在患者の運動へと拡がり、患者による補償闘争も訴訟派と、チッソと直に対決しようとする自主交渉派に分裂する状況や各派の運動の詳細、それらと国や行政の関わりなどを描いてゆく。

第五巻は、1973年の水俣病訴訟の判決までの運動の状況や、訴訟には加わらなかった自主交渉派の運動と補償の決定、それらを受けて始まった患者補償が村社会へ及ぼした影響と村の変化を追う。村内の一部には“利権としての補償”という見方で捉えられるような状況が生まれたあり様も描かれる。

第六巻は、患者補償の影響は小さな漁村には想像された以上であり、くわえて時を同じくして及んできた高度経済成長の影響もそれにもまして大きく、村の消費社会化が進み漁業も農業も大きな変化を経験する。その変化は1980年代も持続し、2000年前後ともなれば、直接被害を受けた村でありながら、記憶されるものとしての水俣病という受けとめ方も現れ始め、“漁村としての水俣は死んだ”と言えるほどのなほだしい変化が進行したとして、本書は結ばれる。

### Ⅲ.

さて、本巻＝第一巻の紹介であるが、その前に本書の方法にふれておく。本書には、全巻を通しての視角とも叙述の補助線ともいうべき軸心が二つ置かれている。それは「縦軸」と「横軸」と呼ばれ、「水俣病事件」を構成する要素であるともされる。縦軸は、加害者と被害者との関係であり、両者の相克を指すとされる。横軸は、病の社会面であり、被害者と社会のあつれき、病にともなって生起した社会事象周辺を指すとされる（第一巻、1－2ページ）。

その二つの軸心から言えば、第一巻は、もっぱら横軸にそった研究である。「村社会の位相から水俣病を、・・水俣病の位相から村社会を研究することに」（同上、3ページ）主眼がおかれる。研究の主たる手法は、聞き取りである。本書を読む者は、岡本が聞き取っている話し手の記憶が明晰であり、かつまた遠い年代（江戸・明治）にまで届いていることに少なからず驚きを覚えるであろう。そのような得難い語り手を発掘できたのは、岡本のチッソでの同僚や新日窒労組の同志に聞き取り対象となる漁村の出身者がいたことやそのツテがあったがゆえであるが、聞き取りの相手の広がりはその範囲を超えていることからすれば、岡本の長年の努力のたまものであるというべきであろう。それにしても、これだけ記憶のいい人が残っていたことは、幸いであったと思う。

第一巻は、水俣病が最初に発生した四つの漁村の構造を、歴史的、産業構成、職業構成、産業的特性（とりわけ漁業の特性）、人的関係・血縁関係等々の観点から描き出し、第二巻で扱う水俣病の発生の疫学的特徴や社会的特徴をもたらした背景を明らかにすることが主眼となっている。

それゆえ、以下の第一巻の内容の紹介も、第二巻の叙述の内容に関わらせながら行われることになる。

#### Ⅳ.

第一巻の紹介に移る。第一巻では、初期の段階で水俣病の発生した四つの漁村を対象としている。一定の視点を保ちながら四つの村の成り立ち、社会構造、その変化が説明される。共通に据えられた観点は以下の諸点である。

- ・ 四つの漁村の概観
- ・ 各村落の規模（戸数など）
- ・ 各村落の草創の時期、村民のルーツなど
- ・ 各村落の住民の職種構成（昭和30年頃）
- ・ 各村落の商品経済の浸透の度合い、人の移動状況
- ・ 各村落の階層分化の状況
- ・ 各村落の「会社行き」（チッソ株）の従業員となった者を指す。以下同様）の人数
- ・ 各村落の漁業の特徴、漁民間の階層分化の状況
- ・ 各村落の村内の親戚関係・世帯間関係の濃淡の程度など
- ・ 各村落の医療施設の状況、疫病歴など
- ・ 各村落の勤労観、勤勉感、文化行事、政治的雰囲気（政党支持など）

四つの村とは、月浦、坪段・坪谷、出月、湯堂である。

#### （月浦）

まずは月浦（つきのうら）である。実はこの村を漁師部落と呼ぶのは、ふさわしくない。本巻で、月浦を漁師部落とするのはつぎの理由による。月浦は、昭和初期鉄道（鹿児島本線）が部落を南北に貫通するまでは、後に紹介する坪段・坪谷（つばだん・つばたに）と一体の集落であった。鉄道の開通により両集落が分断されたことをさかいに、東側の月浦を本村、西側（水俣湾側）の月浦を坪段・坪谷と呼ぶようになった。本紹介では、本村の月浦を月浦として紹介することとする。

月浦の集落規模は約60戸である。住民のルーツについては、江戸期から住み着いていた人々が拡散したもの、および周辺の農村から移住してきた人が祖であるとされる。集落化したのは明治期である。

職業構成は、昭和30年頃の記録によれば、農業（専業・兼業）：22戸、「会社行き」（半農半工含む）：17戸、漁師：4戸、職人（樟脳製造、石屋、大工、船大工、桶屋、竹籠屋など）：8戸、商店：2戸、その他（市役所勤務など）8戸、とかなり多様化している。

月浦は、他の三漁村に比べると相対的に近代化が進み、総じて所得水準も上昇した。元来、月浦の農民は「三反百姓」とされる小農が多かったが、戦後はミカン栽培を手掛ける者もあり、そのなかから高所得を得る者が出た。また戦後は、「会社行き」も相対的に高所得とされるようになった。また規模は小さいが製塩により塩販売を手掛ける（行商）者もいて、比較的商品経済化が進んだ集落となった。自営の各種職人層が在存したことも特徴である。

つぎは村内の姻戚・婚姻関係である。これは村外との人的交流関係を見るということでもある。月浦は、村内で完結する姻戚関係もつづいているが、戦後は外部との関係が強くなっていった。それは上記のように商品経済が浸透し、職業構成も多様化し、住民の出入りが盛んになったわけであるから、当然のことである。

それゆえ、村民の精神構造においても、市場競争的な特徴が生まれてきたとされる。文中の言葉を引けば、「隣に負けがなるか」（負けてたまるか）という意識が村内に充満した。当該村落にも、戦後社会一般にみられた上昇志向がみられたということである。

村落の医療施設としては、近接する農民集落の袋（ふくろ）に個人病院が一軒あり、村民は「病院にかかる」ことがさほど特殊なことであるという段階ではなくなっていた。

以上のように、月浦は戦後に見られた一般的村落の様相を呈している。ただし、その例外も存在したことは記されねばならない。基本的には農民集落である月浦にも、四軒だけであるが、漁師世帯があったのである。四軒とも居ついたのは戦後で、新しく流れ着いたとみられていた。みな漁師としてはきわめて零細で、他家との交流は少なく、漁師間の行き来も乏しく、農民からの視線は、冷淡であった。証言を引用すれば、「長市どんは、どこに行くにもふんどしいっちょ、裸でされきよらった。子供共、小学校まじや真っ裸で居りよったな」。戦後でもこのような状態であったという。これは事実でもあるだろうし、また農民から漁師への蔑視を含んでいるとみてよい。漁師の四軒ともこのように見られており、それくらい同一集落にあっても農民と漁師との間には濃厚な社会的仕切りが存在したのである。

#### （坪段・坪谷）

この集落はすでに紹介したように、昭和に入り月浦に鉄道が貫通したのを境に線路よりも海・水俣湾側を指すものとして成立した。ここは本村としての月浦とはまったく対照的に純然たる漁師村であった。戸数は約20戸である（昭和30年頃）。

村民の多くが、昭和初期天草から移住してきたものを祖とする新しい村落である。

職種構成は、漁業のみが12戸、「会社行き」が7戸であり、「会社行き」といっても半漁半工の者が多かった。田畑をもつ者はいなかった。漁民と言っても、むろん自給自足ではなく、外部との取引はあったが、食料にしめる漁食の占める割合はけた外れに大きく、村内への商



品経済の浸透の度合いは小さかった。村民の階層分化も、大部分が零細漁民なので、さほど進んではいなかった。

村民の交流関係については、坪段・坪谷と本村・月浦との関係はほとんどなかった。後に見る湯堂との関係は比較的濃かった。これは同じ漁師部落同士という村の性格によるものである。

病院は村落の近くにはなく、よほどのことがなければ病院にかかる習慣はなかった。

水俣病は、以上で紹介した本村・月浦の漁師世帯（四軒）と坪段・坪谷の漁師世帯から発症し、発見されることになるのである。

#### （出月）

出月（でつき・でづき）は、水俣湾に接する坪谷・坪段から少し内陸に入ったところにある。村落自体は海に接してはいないが、漁師村である。

村の起こりは大正期で、本巻で取りあげている村のなかではもっとも新しい村である。村落規模は、昭和30年においては86戸と、急速に拡大してきた村と言えよう。村落のルーツははっきりとしており、多くは天草から移り住んだ者からなる。漁師部落であるが、「工場（チッソ）の煙突を見て水俣へ」移った者が多いとされる。言葉も天草ことばが残っているとされていた。

職種構成は、昭和30年頃において、農業：3戸、「会社行き」：25戸、漁師：11戸、商店：10戸、等であった。これから分かるように、漁師部落とはいえ、職種構成はかなり分化している。農家には専業で喰える家はなく、「会社行き」を兼ねているから、上の数字以上に「会社行き」の占める割合は大きかった。「会社行き」と漁師と商店でなる集落とみることができる。

住民の出入りについては、この集落は比較的頻繁で、天草から移り住んだのちに他の工業地帯に働きに出、戻って来た者、「会社行き」のなかにも朝鮮チッソで働き戦後に戻って来た者などがめずらしくなかった。そして外へ出て行った者のヒキで他地域に出ていく若者も多くいた。だから、婚姻関係なども村内で閉じておらず、外交的村落であったといえる。

「会社行き」について特記しておく、この村落は本巻でとりあげた四つの村のなかではもっとも「会社行き」が多い。また、チッソの従業員で組織される生活協同組合「水光社」の店舗がおかれていた点も特筆される。それくらいチッソとの関係は深かった。

住民の間でチッソがどのように見られていたかという、チッソに勤めれば生活には困らないとされる反面で、「会社に行けばものすごいインフレなのに安月給。もう土方に行った方が得じゃて、辞めた者がズロズロ居ったと」（昭和20-30年代の回顧。184ページ）とも言われている。チッソに勤めたとしてもそこで刻苦勉励して上昇しようというタイプは少なく、一つの稼ぎの場としてチッソを見ていたということである。

そのような「会社行き」であったが、それでも村内の所得階層では上位を占めていたのは

間違いなく、村内の今一つの社会グループである漁師を蔑視していた。半工半漁の者もいたのであるが、漁民蔑視は他の村落と変わるところはなかった。

そのような出月の漁民にも、階層化がみられるようになっていた。「会社行き」などで資金を貯め畑を持つようになった漁民、当時多く採れたボラ漁で稼いで「コメの買える」漁師、コメも変えない漁師などの階層に分化しつつあった。これが水俣病の発症後の漁民間の対応の差として発現してくるとされる（後述）。

出月については、村落としての開放性と近代化・階層化が観察されていることもあり、住民の政治意識も聞き取られており、政党の支持基盤の形成もみられ、「会社行き」は社会党支持、漁民・農家は自民党支持という色分けもできていたとされる。若者の間で音楽が流行り、バンド（「青空バンド」）が形成され村内を演奏して回るなどの戦後の若者文化も生まれた。

最後に、医療状況についてふれておく。出月にも地付きの病院はできなかったものの、日常生活に病院などが入ってこないという状況ではなかった。

#### （湯堂）

湯堂（ゆど）は、本巻の対象としているなかではもっとも漁村らしい漁村である。戸数は、105戸で大きい（昭和30年頃）。村の草創は明治期であり、多くが天草から移ってきた人からなる。

職種構成は、漁業：50戸、廻船業：9戸、「会社行き」：21戸、農家（ミカン山）：5戸、公務員：6戸、商店：4戸、その他である。

人の出入りでは村外との関係もあるにはあるが、さほどでもない。商品経済の浸透は、以下で述べる漁業の占めるウエートが大きく村内完結性が大きいので、顕著ではなかった。階層分化については、戦後ミカン農家に転じ財をなした家があり、また唯一網元の存在する漁村であったが、前者は例外的存在であり、網元も確固とした網元漁業が営めたわけではないので、中小零細漁民の集積がみられたととらえたほうが実相に近い。「会社行き」についても、他の村落に比べれば影は薄かった。

村内の婚姻関係については、一定規模以上の完結的漁民集落であることもあり、村内「みーんなやうち（身内）」と言われるくらい、村内に姻戚関係が濃く張り巡らされていた。村内婚姻なしと言われた出月とは対照的である。

漁業について説明しておく。湯堂の漁業の特徴は、唯一網元が存在した村であるが、そのことよりも、とくに魚影の濃い水俣湾の特性にそった漁業を営んだという点が重要である。ボラにしろ、イワシにしろ、大量に取れる魚種を多人数で採るという形態が主であった。「タイ10本で会社行き一か月分になる」と言われたように、いわゆる漁師的意識が濃厚に漂う村落であった。

医療施設について、湯堂には病院はなかった。近隣の袋集落の医師を村落の担当医とする

という取り決めはあったものの、病院受診が一般化しているという状況にはほど遠かった。重篤になっても家で寝かせておくことがめずらしくなかった。昭和40年代に入っても土葬が遺っていたなどはこの延長線上に理解できよう。また、この部落は深刻な疫病史も経験しており、大正期には赤痢が猛威を振るい、梅毒－先天性梅毒患者も散見され、昭和30年代以前は結核が多く、同30年には16戸21名が結核で死亡したという記憶も鮮明に残っていた。このことが水俣病発生時の住民の受けとめ方に影を落とすことになる。

#### （水俣の漁業の特徴）

本巻の終章は、「水俣湾の漁業」と銘打たれ、これまでの水俣漁村の紹介を基礎に次巻から展開される水俣病の発生の説明につながる叙述が展開される。

水俣の漁業の地勢的側面からの説明がまずは置かれる。すなわち、水俣の漁業は不知火海へ魚が入ってくる海域を主たる漁場としていたところに大きな特徴がある。年中、きわめて魚影は濃く、それゆえ漁民は不知火海の外海へと出てゆく必要がなかった。まれに見る恵まれた環境に囲まれていたがゆえに、漁法においても、漁船形式にしてもとくに進歩なくやっていった。

それだけに個別自営型の零細漁民が多く、新たな技術といえば、濃い魚影を追って他の町村から不知火湾・水俣湾に入ってくる漁民から習う程度にとどまり、創意工夫に乏しい漁業であった。このことは漁民自身も自覚していた。

魚種については、回遊性のボラやイワシ、コノシロなども手掛けたが、エビ、アワビ、ナマコ、牡蠣など非回遊性で浅海や沿岸部で採れる種類も多く、豊富に採れたため、昼夜を問わず、女でも漁獲可能であり、零細個人漁業が主体となった。

とくに、エビ（車エビ、本エビ）が多く、チッソの排水口があった百間港などではそれらが多く採れ、そこではエビガシと言われる網を使った漁も盛んであった。水俣病の発見される少し前の昭和20年代後半は、エビガシ網は金もかかるが「金にもなる」と言われた。また沿岸部は、ビナ（ニシ貝やニナ貝）も多く、それらは市場に出されることも漁民が自家消費することも多かった。そのころはすでに水は汚れ臭気もはげしかったと証言されている。

一方、回遊性のボラやイワシの漁は、沿岸から遠くはないが水俣湾の網代（漁場）まで船で出てゆくことが必要で、水俣湾としては組織だった漁法が採用された。こちらもやはり海は臭かったとされるが、水俣病の発生という点では沿岸部を漁場とした漁民とは異なるものとなったとされる。

#### （「奇病」の発生と漁村の性格）

本巻の四つの漁村の観察結果を通して印象に残るのは、村落内部での漁民への蔑視、漁民の孤立と交流の乏しさ、貧しさ、前近代的生活様式の残存などである。このような性格は、とくに月浦の本村の漁師集団、坪段・坪谷、湯堂の村落に顕著であった。そのあり様が水俣病発生と発生後の住民の受けとめ方や対応と深くかかわってくる。そのあたりが本書では、



住民の証言により明らかにされている。この書評の任務を越えてしまうが、必要なぎりぎり第二巻も含めて、水俣病の発生当初の状況の説明を紹介しておきたい。

水俣病が、記録に残っている限りで最初に発生したのは月浦本村の漁師の四軒のうちの一家であった。この家族では、10歳の男児と30歳の男性が昭和29年と翌年に発症し、それぞれ翌年に亡くなった。記録は事後のそれしかなく正確な経緯はつまびらかでないがおそらく病院にもかかることなく悲惨な最期を迎えたものと思われる。この一家の状況に関して、近所の住民は次のように証言したとされる。

「カラフユジもカラフユジ、生活しとること自体が不思議やっで」。「よその畑を借ってカライモでもつくろうかということがない。海だけ頼って、カキ打ってビナ（巻き貝）を拾うて…潮干らんときは家を閉めてしもうて遊んどりよった」（第二巻、32、38ページ）

フユジとは、怠け者、ぐうたら者の水俣方言である。カラは強調語である。このように当初の水俣病は、地元でも、カラフユジが罹る病気だとみなされ、それゆえ「奇病」とされたのである。しかも、最初の発症が、漁師村ではなくあえて言えば農民村のほんの一角を占める漁師世帯（四軒）からであったことが、この「奇病」を村落のものとして受けとめる機会を決定的に失わせたと言ってよい。農民から漁師への蔑視、農民と漁師の間の仕切りが最悪なかたちで働いたといえよう。

その後、「奇病」は、時を置かず坪谷・坪段へと拡がってゆく。この両部落へ拡がるころには、件数からして伝染性の病気ではないかという疑いが拡がってくる。水俣の漁村には、それまでの各種の伝染性の病気による悲惨な記憶が鮮明に残っており、徐々に住民に恐怖が拡がり、パニック状態も芽生え始める。しかし、他方で、漁民と農民の間、漁民間の行き来は乏しく、元来の差別意識から発症を隠そう・見まいとする双方の意識が強く働き、正確な情報も伝わってゆかない状態が進んでゆく。

第二巻で紹介されている象徴的出来事に次のようなことがある。この当時いち早く現地調査を行い貴重な記録をのこしたチッソ水俣の附属病院の細川一医師は、患者の病状は伝染性ではないことを半ば確信しつつあった時、看護婦の一人に奇病と似た症状が表れ他の看護婦らから奇病は伝染性ではないのかと詰め寄られたさい、反論できなかったという自身の逸話を残している（第二巻、198-200ページ）。

後にネコ実験を行い冷静な認識を示した医師をもたじろがせるほどこの時期の水俣の漁村は恐慌状態におかれていた。同時に、核心的事態は隠され、肝腎な問題へ目を向ける人はきわめて乏しく、パニックの裏では何もないかのごとき静けさが村には漂っていた。

このような状況が事態への対応の初動を遅らせ、対策を後手に後手に回させる背景となった。また、村のなかの繋がりのなさ、情報の流通の齟齬は水俣病の存在がはっきりした後の被害者と住民の対応、訴訟、運動に幾重もの分断を生む背景となってゆく。このあたりは本書第三巻において詳しく説明されている。

## V.

本巻の論評に移ろう。まずは、本巻における水俣漁村の性格付けについてである。これまで地方の、しかも後進の地域社会を描く場合は、旧い体質の共同体の存在やその解体にとまなう矛盾や葛藤・混乱に即して捉えられることが多かった。本書の示したのは、そうした捉え方を突き抜けており、つまり、そもそも崩れるべく共同体すら持ち得なかった漁村と漁民の間で水俣病は発生し、村の中のそうした共同性の欠如（分断状況）が水俣病への対応の遅れや一貫性のなさ、補償運動や訴訟の分裂の下地となってゆくことを明らかにした。このような水俣の漁村のもつ性格を、水俣病発生当時を知る住民への聞き取りを介してあますところなく説明した。このような水俣の漁村の性格のとらえ方は、渡辺京二が示した<sup>1)</sup>ところに通ずる面があるが、本書のもっとも評価されるべき点である。

つぎも、上記の点に関わることを取り上げたい。岡本は、これまでも水俣の農村部に関わる聞き取り調査にもとづく浩瀚な研究を発表してきた<sup>2)</sup>。それらは幕末から戦中に至るまでの水俣農村の近代化、商品経済の浸透、チッソの進出による変化の解明である。この研究に関してかねがね評者が気になっていた点があった。すなわち、岡本はそのような近代化や工業化のなかで水俣農村が変化し、いわば共同体が解体する過程を描いているのであるが、それはチッソに働く地元出身の労働者の状態とチッソ経営内の状況に範囲が限られており、水俣病と水俣農村との関連に関わる叙述はあまりない。たしかに水俣病の話は主に戦後に属するからそれもいたし方ないかもしれないが、それでも漁村をあつかう本巻では戦前の話から水俣病の発生の背景となる伏線がたくさん張られる叙述スタイルがとられているのである。それゆえ、水俣病のことを頭におきながら本書の前書にあたる水俣農村の本<sup>2)</sup>を読む者は隔靴搔痒の感を抱かざるをえなかったのである。

しかしその感じは、本巻の月浦をあつかった章によりかなり軽くなった。というのも、月浦は必ずしも漁村とは言えず、農村のなかに一部漁村が入り込んだ構造をしており、そこでの漁民における水俣病の発症とそれを傍観する住民（農民）の眼や態度に、水俣の農村と漁村との関係が集約して表されていると考えられるからである。その点を考慮すると、岡本が聞き取り調査の設定で月浦が選択されたことが、本巻に成功をもたらしたと評価してよいと思われる。

つぎは、本書の「会社行き」の扱いについて取り上げたい。本巻では、「会社行き」については、どの村落の検討の際もその戸数・人数など丁寧に調べ説明されている。また、評者などが想像していたよりも「会社行き」は多く、それが村落における階層のあり方を変えた（相対的上層として「会社行き」が位置づけられる）ことにも注意を促している。そこで、その延長線上に「会社行き」の存在が漁村の性格に影響をあたえたのではないかと想像してみることが、そのような描写はまれである。水俣病が発見され、拡がってくる段階ではどうかと思い、ページをめくってみてもその点ではほとんど変化がない。患者が増え、発生源としてのチッソが疑われ始めたころ、住民のなかに“漁村に水俣病が発生しチッソが疑われているの

で漁村からの「会社行き」が会社のなかで肩身の狭い思いをしており、気の毒だ、申し訳ない”という声があったことが紹介されている（第三巻211ページなど）。「会社行き」が増えたことが村のあり方や住民の意識に変化をもたらしたことはないとみられており、おそらく、それが実相だったのだらうと想像する。

しかし、他方で水俣には、本書で挟み込まれる形で詳述されているチッソの内での労働組合（新日窒労組、チッソ水俣の二つあった労働組合のうちの第一組合にあたる）の運動があり、そこには団結力があったことが示唆されている。このような団結力＝共同性を示すのも水俣の住民（主に農民であるが）なのである。そこには本巻で描かれる住民（漁民であるが）の世界とは対照的で共同性に溢れた世界が水俣にも存在したことがしめされているのである。共同性を欠いた世界と共同性に富む世界が踵を接して存在したということになる。それはなぜなのか。一方は、農民であり、他方は漁民であったからだと、きれいに二分して考えれば済むことなのか。いい方を変えれば、なにゆえ、かくも共同性を欠く世界にも共同性に基づく領域が生まれ得たのか、その辺りの過程はどう説明されるのかと問うてもよい。いずれにしても、問題は、先にも触れた農村と漁村との関連の問題に戻るのかもしれない。

#### 注

- 1) 渡辺京二「流民型労働者考」（石牟礼道子編『天の病む』葦書房）、1974年。
- 2) 岡本達明、松崎次夫『聞書 水俣民衆史』（第1～5巻）草風館、1989－90年。